

シラコバト (*Streptopelia decaocto*) 若鳥における ハトカイチュウ (*Ascaridia columbae*) の濃厚寄生症例

白井 温¹⁾, 小亀 舜²⁾, 松田 一哉²⁾, 浅川 満彦^{3)†}

1) 埼玉県大宮公園小動物園 2) 酪農学園大学獣医学群獣医学類病理学ユニット

3) 酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類寄生虫研究室

日本では関東地方北部に生息し、国の天然記念物さらに埼玉県の県鳥として指定される飼育シラコバト (*Streptopelia decaocto*) の若鳥で線虫の濃厚寄生症例を経験した。おそらく、当該ハト個体の健康状態の悪化にも大きく関わっていたことも考えられたので簡単に報告をしたい。

当該症例は埼玉県大宮公園小動物園の繁殖用フライングケージ内で飼育されていた約100個体のうち4個体(当年生まれの若鳥)で、いずれもその死体が2016年12月から2019年2月にかけて確認された。これらを剖検したところ、小腸に多数の線虫が認められたので(図1左)、小腸のまま10%ホルマリン液にて固定・保存された。また、虫体が充満した状態で小腸の病理組織標本を常法に準じパラフィン包埋標本を作製し、これを薄切後、ヘマトキシリン・エオジン染色をした。

固定された線虫をラクトフェノール液により透徹し、光学顕微鏡にて形態観察を実施したところ、頭端によく発達した口唇が認められたこと(図1中央上)、雄尾部腹側に吸盤が認められたこと(図1中央下および右)などからハトカイチュウ (*Ascaridia columbae*) と同定された。

ハトカイチュウが寄生していた小腸組織標本で

は、筋層における多病巣性軽度の好酸球とリンパ球浸潤が認められたが、粘膜損傷あるいは同部の炎症変化は認められなかった(図2)。

ハトカイチュウは日本産ドバト(イエバト) (*Columba livia*) でも普通に検出される^{3,4)}。しかし、日本産シラコバトでは正式な記録は得られなかったが、本種はユーラシア大陸や二次的に移入された北アメリカに生息するシラコバトでも多数の検出記録があった^{1,2)}。疾病の関係については不明だが、今回のように多数寄生していた場合、腸管内容物の通過障害および蠕動運動の機能不全などの悪影響はあるだろう。

文献

- 1) Bean, D.L. et al. (2005): Parasitic helminths of Eurasian Collared-Doves (*Streptopelia decaocto*) from Florida. *J. Parasitol.* 91(1): 184-187.
- 2) Fedynich A.M. (2008): Parasitic Diseases of Wild Birds, Wiley Online Library.
- 3) 植松 淳, 土屋公幸, 浅川満彦, (2013): 国際空港で回収された鳥類の疫学調査応用 - 内外寄生虫を指標にした予備的検討, 酪農学園大学紀要(自然科学編), 37: 167-172.
- 4) Uchida A. et al. (1991): Check list of helminth parasites of Japanese birds. *Jpn. J. Parasitol.* 40: 7-85.

†連絡責任者: 浅川 満彦 (酪農学園大学) 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

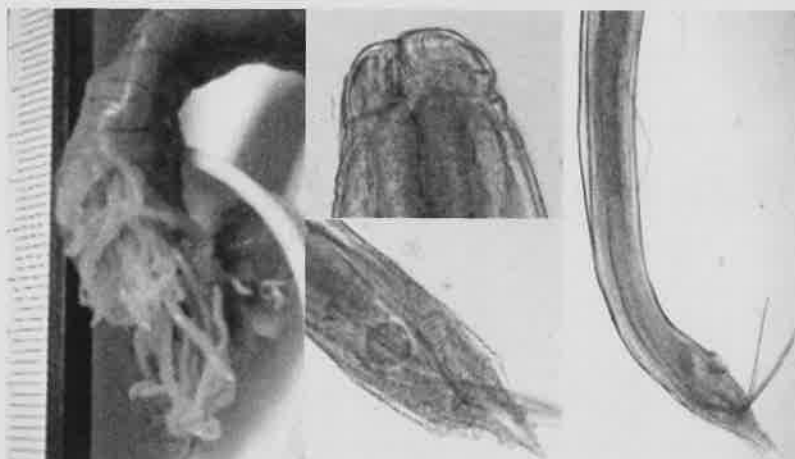


図1：埼玉県大宮公園小動物園の繁殖用フライングケージ内で飼育されていたシラコバトから得られたハトカイチュウ (*Ascaridia columbae*)
 左：小腸に寄生している状態、中央上：ハトカイチュウ頭端、中央下：同・雄尾部腹側面、右：同・右側面

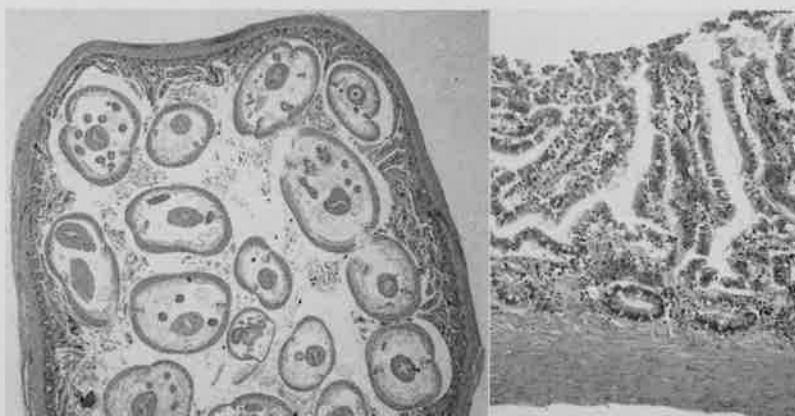


図2：埼玉県大宮公園小動物園の繁殖用フライングケージ内で飼育されていたシラコバトに寄生したハトカイチュウ (*Ascaridia columbae*) による小腸の病理組織像。
 左：小腸横断面、右：小腸粘膜拡大像